

2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9

和朝
今昔
物

竹部五



今昔物語

傳

五目錄

○世俗傳

一 將門純友謀殺伏誅語



今昔物語 体部五

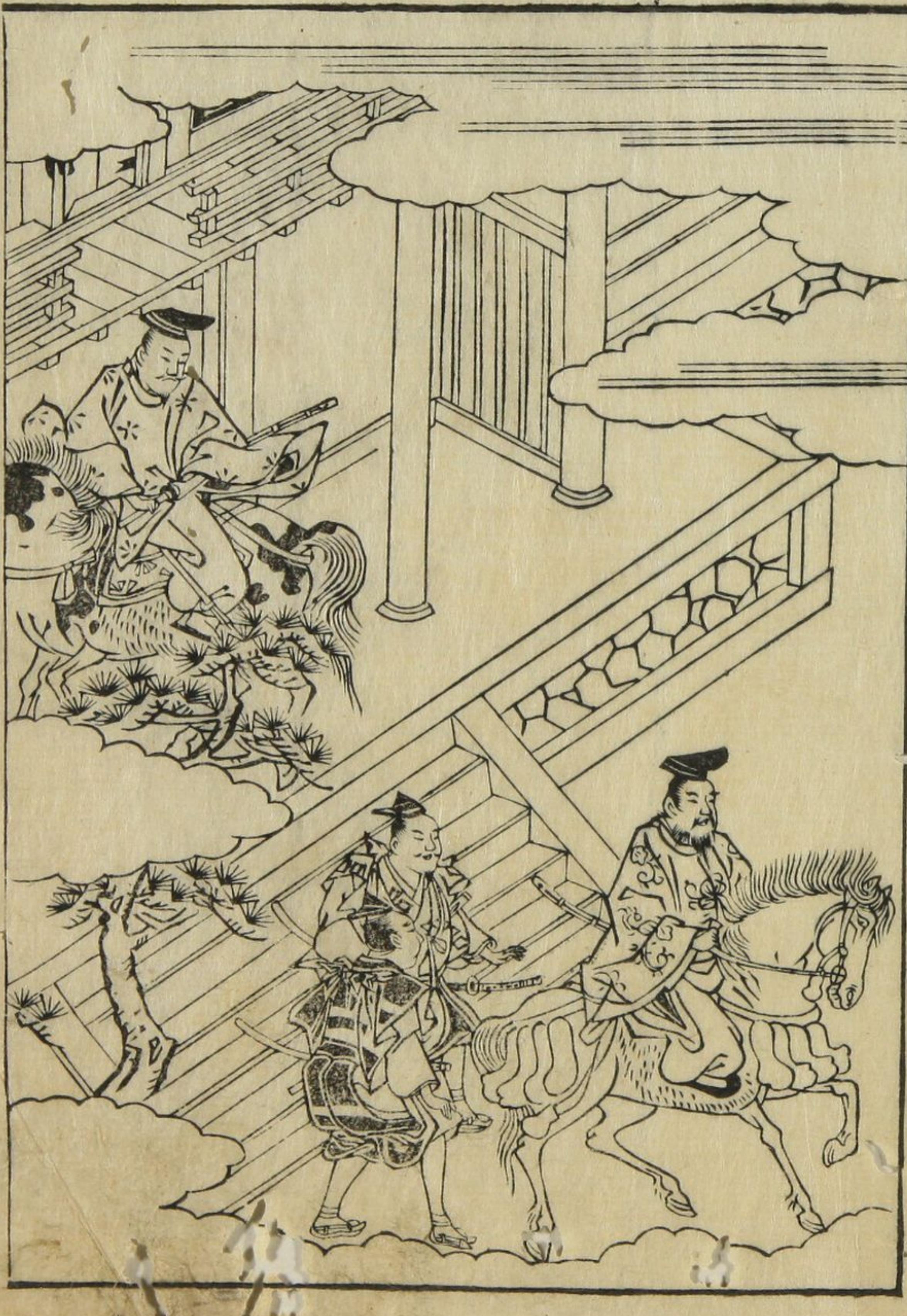
○世俗傳

一 將門純友謀叛伏誅語

此段本文乱脱。齟齬不少。以故参考將門記等諸實錄改記如左。文義与本書大異者夫。思之。

今いとく。六十一代朱雀院ゆうす。萬平四年に
とて陽南海の海賊やつて。國民とうやますふ
じうて。官兵とたかひてゆくとく。もとぐを首
をさげた。さくわ。同年六月。南海の張り
着る純友伊豫掾從五位下○良範男やつて者。其黨がわゆ
ゑく。伊よ圓日根ゆ。千餘被の船とまぢ。海

上御の宮物とうづひとくしよよくて南海と
ちうじへきよりして紀淑人きのうじん長谷ながたにを位い豫よ宗むね從つ四
やしてはくへる。ひ淑人仁あととらつく萬民まんみんと
さくまくべ海賊かいぞくどもあぐくちやまうこう。臣
年七月下向淑人純友じゅんゆうと相あわせてして上宿じょうしゆを
うのこう下総さくま國くに任おき人相馬あいば小次郎平將門おぢらひらまさだ滝口たきぐち元良
男おとこを在ゐると。び將門まさだが先祖せんそハ極武天皇ごくぶてんのうより
三代高見王たかみのみこと一男いと高見望たかみのぞまた六人ろくにんれす。一
男公平くわいへい良望らうぼうとつよ。後あとよ圓香えんこうくわくと。結むすお
府ふ將軍まさだと。貞盛ていせいが又また。次男公平くわいへい良時らうじと



少佐守府將軍より。見將門うなづき。三男は
上総守平良基（うらゐのり）とつよ。四男と平良経（うらゐのり）と
守府將軍より。五男が材を立即平良太（うらわたつ）と
六男が布子（あうこの）。即平良持（うらわもち）とつよ。一族（ごく）と
おで解馬（えんま）とす。貞盛と將門とて後足第（し）者たり。
貞盛うそとあひうへ。將門の勇（いさぎ）あつて居ます。
うそど數達（かずとく）乃全殺（ぜんじやく）とて。かくも一とて
うそとあひうへ。もはとわんど。あひうへ貞盛あひうへ
詔文のたれもの録（のりふみ）ゆく。將門も後者五人（ごじん）を
異（ぐ）て取（と）りあひようへまろみ。門あるとあひう貞盛

親さんと。沙門かよと將門。遇。一年弘興
巳。さうかよて假とまくと。はいど。さくに
ひとつ。親さんのおと向き。貞盛が。の更
の。おもむりどち事ふれこして。空令へそよぐ
や。ひとうれて。うづく。同年八月十九日。將門見え
あく比敵。よのびづ。平安城とえや。ひよぎ
う。遼の。うづく。ちよふとぞ。うづく。ゆあそ。
将門。いよ縁。かしが。帝王と。うづく。純友。わを良
きし。が。圓向と。うづく。ゆうて。序。治。あくあい
きよ。圓向と。うづく。うち。二年三月。將門

國事へ札をねこし。金家門内厨ニ郎將れ。同太宰原
田郎將平、同立郎將焉。同矛六郎將武つト。一族
郎兵兵相りて。考陸國よ責入く。其伯父常達
大掾平國香と付教して。一兵兵押経と。國香と是
かとあくまひて。のぞぬるべ干戈とおこし。とて將門朝廷にさ
くゆる。とばせられて。明年正月ある入て罪と謝と。お延罪を猶
として。うそん准して。ありくる。うちら将門をもうて。考達よ才入
國香がけて。そなえどあくま。貞威うる。ひざたて。かかれて。かくねる。
ね門まで。貞威りあれつ。ハグ。もめ。うれ。ごくつて。かくねる。
じくつて。すばつて。さぶる。又曰。將門づよましては。極良薦。され
と中あくられ。それへがどるところ。田畠のわくもひよもう。將門
かよせそゆよくつて。うの毛筆ひより。スをあくそばほよ。没
信もろい。うそ。義ひとこのま。又源復。扶ガ方よよを相手よ
え。後四佐下。とつま。將門よつひる。一國公うすむ
村田男

も。坂東公う。とひくろり。且。罷やれ。どうぐ。とつ
一絆曰。奥世田目みさげと。がて入郷と。其國乃
郡司例かと。とつと。まき。など。郡司うさんと。將門げふと
同かし。軍兵兵相侵し。とつと。下野國よ責入く
ク。國司一説國司右大臣
藤原恒徳トアリ 軍と卒して。うやだく。
國事もあい。率内共う。要害みう。うて。ふやだく。
ふ。軍兵兵共う。う。う。う。要害みう。う。う。利を
失ふ。あくま。將門け。民一人をめう。う。不。乃。候
罪。ふ。司の敗敗。軍士の剛脇。も。う。く。う。う。候
ば。あくま。軍兵も。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
う。と。と。と。林みひく。と。と。と。と。と。と。と。

ひそく小を除きて。頭の束ね中に伏。一月は
そよよのこと。金輪裏とあきこすふもれて。曉
方アリ。どうも。聞司さんをあざうやう。み。
里人あうて将門がおひいと。のぞくうとうを
山司よとぐ。聞司うしと笑てねじ。さうがまほのと
ふのうとくやまと。何のうむりき。どうものと
ともめど。備をうそしてそれと退と二十駄町
ふたと。將門が休兵のまよ退ふる。わらう歌とう
歌うやまとして。軍主ははづかして。敵の陣風よ
おひまわる。山司陣風の歴史とよして。あがねずれ

反応のあうて。放火ともかくあやじくよ。た乃
まれゆき。わ門軍と傳へ報とくらそもくくせ
するべく。山司さんと見て。そばうれしなく安
どらし。傳をきく。うあやすぐんとすくべ。ぐら
林ゆく。山司の勢り二とくもくと相く。み
みへん。うち。わ門が軍主を逃ぐ。二十駄町を
く間。息もれ風つゝと。トモよからぬよ。うか
うかうて。山司の。相馬勢力とづくにとく
く。貝繩とあく。山司のうろ満がれよ。

西司三方の欲よりあきて。途に公先ひよとれ。去
くす公もよび。西司亦有みてゆげどく矣。わ門下總
國と追め。うれりよ野へうつ。よ總下總武
郡相模を相あづくて。あづく欲とる者なし。下
總ふ相馬郡よ都と建一卒曰下總國檜鳥郡
石井郷ニ都ヲ建ニアリ。あま城
移公りておく。と高おも郡の津とりて。京
乃大津とす。わ門へ極武天皇み代の孫なり。
帝往とう歩く。昭穆さむいまと生をうけ。天下に王
くとつゝ。るぬあづきうそ。自平新宮こ
も景く。わきの平親王と申とばれ。わ門が

才將平新宮みいく。帝往く。即ち天よりゆす而
き。びゆく。あきらかにあくべや。新宮しんぐうのく。我
らもあれよ。かのせよ。かのせよ。討りとめられて
何のけ。うあんといふとされば。將平もひづてそ
退ひて新宮。たれ大也。大中納言。多^よ儀。文武大
介。いまも百官と互これを今世は從へて。國東百官とす。
を。庸情こゑのえ。公けり。す。わ門が全才。御厨みくりや。御衣みくぢ。不禮
矣。も才大。豪魚將平へよ。也。も才。文武の爲め
の下。終乎。も才。六扇ろくさん。わ門へ伊豆守。常。接。涉
鹿別處くわいしよ。比経ひき。い。常。接。涉

よと終々。武秀の持ち與つ世主の寄房をすく。えどは氣
の相模守たり。かくも國をもぐてねへ。よと城
であらのわびぐれとむだと。新官も武秀相模守公絶
ぐうて。下藩とくもくる。國司若原弘雅。お司人中
代うみが宮へ。將門よやうて。下藩とらしきそ。みげ
うやう。それよりと母ふゆとて。よと母久若原右衛
門。下藩とくもいて退ふと。將門書を公太政大臣の
件承歎と。まこと

將門討従一國之眾科難遁伏捨將門。
柏原帝五代之孫也。従永領半國。壹謂非

運哉。自古振兵威。奪天下者不少。皆史書
所載也。將門天之所與。在武藝。而云家云
人。頗無褒賞乎。若被下譴責之。其耻辱
面同何施。推而察之。甚以幸也。將門少年
之日。奉名符於太政大臣殿。下數十年之
間。致勤公之誠。然相國攝政也。不意奉於
此事。歎念之至。不可勝言。將門雖有崩邦
之謀。何可奉頌舊主。貴閣賜案之幸也。誠
忍誠惶謹言

天慶二年二月十九日 將門

謹上 右政大臣少将閻賀息下

や書く。されど。將門追付の汚辱と
あ。佐野社へ行つてまづふ 神宮難事記曰。天慶三年二月九日。被進於二所太神宮。種々神宝物等是彼東賊平將門西賊藤純友可被追討之由依祈禱也。使參議保三位大中臣榮主頼基等也。

年正月十一日。右政官舟とあ海東と通の國司み
ほりて。財功ある者。は。うひの裳をかくらぶ
さゆふ不知ち。貞外従五位下。あま尾張宿御言證。右中弁五位下。重修西國經。改治那長

相職。左近官府奉車郎。文粹ニ見たり考へば。此處の原經基
貞純親王男。六孫王天福五年六月十五日始賜源姓。鎮守府將軍武藏下野信濃伊豫上野等守正四位上太宰大貳式部

元内蔵頭兵部少輔所謂源氏之正統也。 佐野 カク

て。將門が謀逆のアラサ奏聞と。これよりて位を
さばき。一卒曰御姫の源經基は。とて立て。立てのうち
叛逆と。奏聞を朝廷より。対廷より。対廷より。御
きして。常陸下總石見越後越後より。御みの批判の判決。解と。とて。とて
おれと。さうして。そのうち。お純友。海賊。じゆがさ
らひて。其肩と。さう。常に。南海。山陽。冬の國。に。行
て。官船。おさへ。官舡。おさへ。將門。が。謀反
れ。と。聞て。やうの。びんと。縁と。体も。手。干。高。も
負。公奏聞。さん。ぐ。わよ。十二月。下旬。毒手。公。石奥
あ。陸路。より。上。海と。純友。と。外を。支て。追は。と

義よ。千高内なる而をもてえ。根津、鬼を海に
波驛よ相そくてはくよきだいひともけり。千高
井に文元以下討ると。千高がいわゆる耳鼻
をそぞろて退散し。されどまとうじてり。捲
磨の海面惟幹とせらゝくす捕。南海とかくらふ
陽と陰あらかくうどりとく。將門純友同様
在原して比歟。よのびりて遂に公綱。是年
中うちわ門へ同乗へやもしと。純友へ往あわうと
蟬記しけり。今年うのゆふかくど。ある一
宵よらうて。天下の繩劫とからむ。向三年二

月將門純友討ひて。參議右馬門脇若狭太守と
征夷大將軍や。一書曰。汝は臣部卿忠丈より追付の宣と
使を立て。青一筋力と鴻毛と。牙刑殺の者。太守。教位
源経基。多岐副將軍。相あらず。ノリトコロは太守
危矣。京圓幹。太守。平清盛。教位源経基。圓幹。
圓幹へひしきる。又小野好古信ニ佐大納言。家慶。子。
小野好古。公材男。家慶。子。と。兵船二百餘艘を
ひそめ。伊豆國へ移向。ばくと。小野好古清子
令婦。おれぐくをす。され
草を経て。あひうく。おもんぬ。跡に。かくの。を。今。に。聞

室へ下野押須は儀左衛門秀綱といふもの
あり。がといた鐵冠通と公子は八代を次ぐ。雄
がすなり。某をもんとあそぶ。秀綱のうれよひをりしが。
おりくらく。我わ門と因縁とて。約あとめと。日
本と曰ひて。もんとやすし。將門が館りゆゑと
羽面し。其跡とうりとみよ。其窓よあくざらゆく。
そくちゆき代多び覗く。下野國もうくと。常陸國
平貞威姓名と平をみ詮詮と。自是より國考とわら
よくとせて。うの葬儀と教さきとけり。わらべ
たゞ候じて。日を一。二月卯日貞豈秀綱ぬる。

隣奥下野の勢とひとす。一万九千人にて。下野
山よづらむ。日とてふ若春みなしと間。明日將門が
陳されよとて。往べと。後まつて。馬の鞍とやろ
し物釦と体よりて。お門とて。間考取ほりし。
歌謡紙うどひよきとしよ。歌うひともうと
考あら。将門とくとく。朝兵數千人よ風うね
ともとと。四方乃林中。わざひいとのちよもいと
一室。全身済。扇下野守おれ。同大手衆よ難
く。お年をふ。千餘人をうそとて。歌のりてゆる
べき順路。夜中れんまどうとて。に二回よる。

ゆくにあくよあくまうも。そのおとすて墨壁に
ざく葉さ。其のに口紙わす。駆引自在
うよ。のあくよは軍士百餘人をひきて京
らし。将門に精兵二千餘人をひきゆそ。おけ
そくやまど。都合四千餘人相馬の駿娘
をまうち兵を。すてか子の下駄。将門が兵二千
餘人。よそ。歎のこりとあらむ。不思
もも。やれどさんでせり入歎。一万九千餘人を
づる。もととつて。すすめとて寝る。ま
西。欲ふくよあくとおとせぬとばあとそりだ

て我さんと逃げ。されど。真威秀郷多ひ氣
と屬を。拒く。游ぐ。うも。あて。ゆき。林中へ。
ゆく。新入京。船少く。資金少く。困
あきれば。石千れ雷の一音。ゆらぐ。ざくみ
米。千万と。りと。ぎ。それと。まて。歎兵。こ
びて。やく。きと。つ。だ。から。い。ま。は。す。と。又。を。も。く
逃げ。の。歎の後。と。ち。切。る。将門。が。お。ど。り。す。と
ち。く。か。て。相。ま。く。く。そ。り。く。一。道。よ。や。く。ま。く。と。育
を。も。ち。く。が。わ。と。よ。歎。い。逃。け。く。れ。ば。彼。坂。切。く
あ。づ。く。ほ。う。よ。み。う。か。う。と。こ。う。と。墨。ア。ク。ガ。す。

けつあらば射るふとれ。敵もとくとて
こをあま四角八方にあびらるあた将希けいは
て引返くる物見みら年としスとしとめどもとめど
ひく将門じょうもんが軍士ぐんしの貞感護技じんかんごを毒紙どくしと
らえうれ新室しんむろこれをすてせが取とくと
よと下おちけまでくげゆがさうざる者まことと
ぐきを參さんめぐらそよ被はれうれ新室しんむろを貞感じんかんが
毒どく衣服いふくとあくとて一首いっしゅの詩しとする

毛けと目めのあづけを殺ころする者のぞと
は安やすどよ紙はうて跡あとはくわくうのら

將門じょうもんといふ。今霄よの夜よ行ゆ利りとわくよりとよる。
欲ほとあて詩しとだ。欲ほいた努つと行ゆ方ほうに小こもりと入いかる
生うる。廣場ひろばれ合あ戦たたかいはあもうすよ皮は。萬方まんぽうの
古いの氣きをわくわされば。怪あく軍ぐんとて下げ緒じ
みつりて。要害あくわにうそて。變かへ無な。氣きにちよどく
相あ戰たたかり利りあうべ。あくもうひまきて後うし引ひ退たるべ。
要害あくわふこりつむづく。あくも利りあうべとよ。
安房守あんぼうのかみ奥おく世よがつゝく。合あ戰たたかの利り。進すすてたたい崩くずる
虎とらとちり。退のく財たの虎とらと崩くずれる。よそいつ萬方まんぽう
の爲ため軍ぐんして氣きよ。欲ほの氣きと氣きくよ。



敗軍の追撃勢。何程のうらはあらま。よせあ
踏散してすくとよじよよて。あぐく追跡と。わら
が先陣。常陸の経明。安東玄蕃多。敵をあふぐと
油断して。あくの真感。夷郷。とある。敗
軍れ左軍。そこ内の物の角みとうづくびとつて。左
家よ入る。の晴向。かくまく。真感が一隊へ
旗を舉てよせあり。夷郷が一隊へよそよそ
歎ひもつたよはく。近くきつて。圓をくわどほ
く。ほのうづくびく。うなづかれて。経明。玄蕃が軍
矣。一氣かど。立足もく。敗軍にて。將門が謀
人。備をゆく。とちづく。かくよ。将門全勢
將門が平安房守無せ。物を仕合。金を下す
七百餘人と。り異し。彦ゆく。伊方と。尾風よかんて。
侍やうつて。夷郷が九千餘人よ。金取りあく。うき
あく。まあか。底づく。おとゆう。あゆよう。まく。

よきぞれうれ。貞威夷郷があら。郷よよまでねそ
いある。よせみね平。不絶まね方。住立まね方。一
とんあくこみ。きくやつて。氣ふよかく。多
千餘人とんで。遙て。二十餘町。夷郷。軍士九
人。備をゆく。とちづく。かくよ。将門全勢
將門が平安房守無せ。物を仕合。金を下す
七百餘人と。り異し。彦ゆく。伊方と。尾風よかんて。
侍やうつて。夷郷が九千餘人よ。金取りあく。うき
あく。まあか。底づく。おとゆう。あゆよう。まく。

巴字小退まつる。須臾よ変化して万年みゆく。
秀郷もよろづて知らんからて。やうくの多射
やくす。秀郷が軍士氣つきをとどめそは。陳
の兵二千九百餘人兵失く。将門もうち勝などよ
ろじびとく攻撃とくらで競う。秀郷うよ
うとやうて運へ玉す。宣城のそれくとも。つるぎ
がまざき。まことれくと秀郷とよひに付ひまよ
と。方をよそくおかとぞねよと秀郷がよだち
干廻船を市を向ひ野王舟引舟等。令を
於てよそだれよ。もうあるよ貞盛が一万餘人よせ

本くさりとあらじて往てくるとえしば。ゆうじゆ
うわ門う軍兵す。うりぬまくじき。四角八方にひが
と。残る兵まづ六七百。將門をひきつとあら
ふのく。敵もよそりうれい。下総國よつう。廣
廣よよそこも。一書曰下総國辛日月十一日貞盛
秀郷逃げて。下総國よつうてまれ。將門要害を
あひてよそか。貞盛相うちてへ利あるくじばと
やうい。夙とより丈尺もあらて。將門をよしよ程數が
あらぬまう。日月十一日將門よづくと相殺よ。
はくれ京都より羽敵逃げのちね。參參門

右軍右軍副將軍刑部右丞軍右郎。散住源經左
以下の官軍數万人。後河内まで兵の下。被脅脅
乞ひ。今まて將門下つとさもす。ひきの國を窮ど。
國怖て。あそひに兵行成に陥る。のちの兵千人
小舟よろこび。將門勇氣。すばら。甲冑。兵
船。後馬よ般。とくと先登。壁。碑。強。と
明。のじ。其の巻。みやからて。おもむかね。と。う。ざ。
後軍。をと。え。れ。よ。數。と。貞。威。秀。卿。が。あ。ち。縛。
易。て。と。そ。ん。い。ざ。剝。後。時。う。り。そ。そ。る。や。く。

すぞ小賊。小よほづん。わ門氣よ。まきて。すぞ一猪。故
の中。に。斬。て。入。秀。卿。が。勢。大。將。と。知。られ。ば。其。軍。少。
而。資。方。以。下。而。給。人。と。く。と。く。と。く。と。が。し。將。門
勃。然。と。て。而。公。と。く。と。く。と。く。と。討。た。ち。追。あ。ざ。と。
子。夏。万。代。と。あ。れ。ど。も。一。人。され。ば。す。で。れ。け。ぐ
る。ゆ。る。か。よ。お。平。お。武。考。五。千。給。人。り。き。つけ。故
を。逃。退。ま。く。と。う。奥。底。ふ。百。給。人。と。そ。接。合。よ。入。て
責。ひ。や。う。と。秀。卿。と。百。給。人。と。そ。う。し。ろ。と。そ。き
つ。そ。と。そ。み。う。と。貞。威。一。卒。作。秀。卿。と。そ。う。と。ほ。ひ
て。お。ら。う。と。お。將。門。が。う。年。の。眼。と。曾。れ。繼。と。く。と。

かくの内に射出しけり。將門を殺すの體がみ將門がみと
ひき一筋さしだふよつと。さるよりうちにはよしもうちには
秀郷ひでをすうて。將門がみが肩かたからよくな。一本曰貞威
りうて將門がみと死死した度たどで、小利こりと失うしなうが秀郷ひでつうて落おちまく
將門がみを毒どくすよ通とおうの安やすぐすりよとて將門がみが寝ねてよもじりて射い
さうと將門がみが死死と死死。後あと無む百九十六人じゆ。安やすがよ
マと死死まく。死死と並ながくは死死と。將門がみ今手て侍し廐くわ下くだ野の
家いえわれ。并ながくまく安やすを死死。相模さがみ國くにをりて付つる。
安やす房やまと守もり與よ世よ。よし終まつて後あとを。坂東ばんとうををあれさう
あくをつて殊ことををれさう。坂東ばんとうををあれさう

夕れば三月九日秀郷より往四位下と擇り。不承武
姫あ圓のをすれ住ざれ。貞盛へ後五位下に叙せ
右弓筋よ住ど。神官雜事記
叙修理大主あ久(けんよ)は(ふの)守府わ軍也あ
まう。内大臣將門(うちだいじん)が頸(くび)京(きょう)を(ちよ)
らう。四月參詣右馬門脅(わき)なるもよ。今方刑部卿
忠舒(ちゆうしゆ)散位源經(さんい)墓。ナラ京亮(きょうりょう)芳原(よしはら)圓幹(えんかん)。上監物半
清基(せいき)教佐(きょうさ)源乾(げんかん)因(いん)多。後河(ごくわ)より不向(ふむか)ヒ。去(いそ)が
若(わ)京純友(きよじゅんゆう)。伴(とも)縁(えん)傍(わき)波(なみ)波(なみ)浦(うら)を、ひどりうるが。
所(ところ)は京圓(きよわん)と合氣(あいき)と。圓(わん)自(じ)取(とり)軍(ぐん)も^レ聲(こゑ)
固(いのち)使(つか)ひと般(はん)基(き)と共(とも)よ。而(いは)波(なみ)圓(わん)也(よ)。達(たつ)路(じゆ)

ゆ。純友國府くにゆきより來て。公私こうしの財物ざいぶつをうがひ
た。國風くにかぜひづきを言とし。二箇月にかげつと經て人數じんすうを
置おきし。修政しゅせいから。官軍くわんぐんれ到いたる。公私こうしの財物ざいぶつ
うち追捕ついふ使つかした近侍きんしや小移こいはぬちちを官くわんとし。
源經基げんきと次官じくわんとし。大東門尉だいとうもんい若爾慶幸わくじょうと判官ばんくわん
や。右金門こねん志し太玄春たいげんしん宣せんふうを曲まよく。播磨はりま修政しゅせい
二箇月にかげつを發向はっこうせし。官使くわんしはまことつてぞれにあつて
伊豫いよ國くによおしつゝ。官使くわんしはまことつてぞれにあつて
純友じゅんゆう來きみやもひづき。有ある恒利つねりとつまのじそじそ
み賊み賊はとまなうきて。國風くにかぜが汗かせある。じ恒利つねりへ



賊後乃宿於陽。海陸並道。通塞の塞門を乞
ひ。西風うちと指南かへて。賊とほくちよ利とひ
ひ。至る。至る四年五月の賊も。ひそかにふた寧府
みゆうそ。累代の財物とづび。ゆく私をからて麻紙
ゆきほふ。そのし官はねお。陸地よりゆきし。
ままで。畜室をひ。海とよりあらうて。義弟圓^{スミノ}_{スミ}多^{タカ}_{タカ}は
みぬいて。アリ合戦と。畜更勇と。うよて。姪兵
をもそ枝ぐ。恆利遠方を相もよびて。殺百乃
賊と。うりどり。敗軍退^{カク}て。かくもあて角え
る。官軍賊^{カク}入。かくつまそ船と焼。賊後

はかよざれて。わしひのまし。或ひどくろ賊船がる
と。ハ百船被^{カツ}り。老と少とあらびがる老
と。あらひひやげ。さあらひひ隊。あと純友^{ヒロシ}。少^シ
アモト。往^{カム}。岡^{カム}。かげ。うぬ岡の難を固^{カム}。若
くろ橋^{カム}を保^{カム}。と。老純友^{ヒロシ}。また丸と付
くらべて頸^{カム}とあくれくらぶ。一本日^キを保純を死生
識^{カム}。一書日^キを死生年十とちうける。捕^{カム}ふ樹^{カム}。ひそそ
生^{カム}。ばくたる。まきを九。幼年^{コト}と。密殺^{カム}。死^{カム}。しげき。ふる。強
力^{カム}。かのの。要^{カム}。付^{カム}。一書日^キ純^{ヒロシ}。付^{カム}。と。あり。一書日^キ
活^{カム}。方^{カム}。と。わ氣^{カム}。強^{カム}。と。射^{カム}。ける。と。あくね因^{カム}。殺^{カム}。あら^{カム}。
首と。口^{カム}。七月七日純友^{ヒロシ}。死^{カム}。おののび^{カム}。一ば
お^カ。近^{カム}。場^{カム}。と。そのうと。拳^{カム}。と。あやれを^{カム}。あら^{カム}。

今昔物語(未定名)卷三

全齊樂詩卷之二

掃
魂
命

あれどもやい。兩手右扇門のやうに府主拂御在上
四世孫天忍とつよ。畫師と肉裏よをとて。純友をた丸
人命之後也。ふ首右近も拂ゆやう。其面ゆきと二つね首
筆すれわゑとぐ。被首ぬけ経とざきとめぐらせた。
肉裏へりひ入るがくにふやいびとねもさしをば。左上
左近も拂ゆりて。其首は厚てすりき。額のく
らあくしかづく。さくとくろび住とい物のくらと写
とせぬ妙絵いづる畫師なり。ひくと取とば。檢狀
遠使な幕門府主あらに善那とぞと。なりの特
き。遠保よは嘗ておれまわり。八月か小野好古

瑞氣至二月より大敵されとありる。東軍の兵士は乞食
を多くあへようとしており、同五年三月住野方守佐^{シロ}幸
敵に候をそそらう。神宮雜事記曰。天慶四年三月廿八日以
後遠江守邦、神封戸各拾烟。被奉寄太神宮。又依官省。尾張三
名賜一階是則依將門追討之御祈禱也。又七道諸國神社被
奉増位階。○一書曰。將門純友亂達の仇也。佐ハ備官みゆきもゆ
く。又大和の冥助よりそめやくわうびわと。其報賽カツリニワレのちて候。而
乃のみをすか。○江次弟曰。臨時祭。平將門乱達報賽也。○一
書曰。以財の多寡をもれりて至る。五年四月廿七日よりうのた乃は後
ハ梅子守あるえ羽衣をす。麻人奇人がく十人たり。紀雲が修るすれりせひまも若手と云はる事を修むと。始く賀雲一
紹喜あり。是東西乃と見れもぐまうがさうとあんぐさう
竹下也

今昔物語五

今昔先生詩稿卷五

卷五



